
リトバス

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトバス

【Zコード】

N3822A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

十一月の初め、親父が死んだ。そんな僕の元に尋ねてきた彼女。

僕と彼女は初対面のはずなのに、彼女はまるで僕の友人ように振る舞い、嘘をついて僕の家に上がりこんできた。そしてなぜか理由も分からずに彼女と一日遊んだ。その日の夜寝て、次の日起きたときにきづいた。僕は彼女が好きだという事を。そして僕は知る。彼女は僕に嘘しか言つていなかつたことを。嘘と実実から嘘。あのときの僕は何にも知らなかつた。これは、嘘から始まつた僕のストーリー。

(前書き)

よくぞ言つた わたしのことを
遙かなる恋人の前に愛着し
執していると 呼ぶ者は
いかなる愉悦も まさりは
しないのだから
遙かなる恋人のあたえる愉
楽には だが愛する人は
私を嫌つてゐる
わが運命は
愛しこそすれ愛られぬ定め
なのだ

リュデル カンソより抜粋

- 他が為に、我が為に、〇・ニ・

親父。父さん。が死んだ。

朝、いつもより遅く起きて自分の部屋から出たら、人形のように立ち尽くしていた母と兄さんがいた。

母達の視線の先にはビールの空き缶を片手に眠るように父さんが倒れていた。

母さんは膝から崩れ落ちた。

兄さんは煙草に火をつけた。

僕は兄さんから煙草をもらつた。

火をつけずに指先で煙草をもてあそんでいたら母さんが言つた。

「あら、まあ」

死因は脳卒中、原因は詳しく説明されたけど……まあ正直誰にも分からぬのだ。実にリアリティがあり人が突然死ぬのにはありきたりな死に方だ。

この十七年生きてきた中で、珍しいかもしれないが、死がこんなに身近に起こった事がなかつたから、免疫や抗体が凄い速さで僕の中に出来ていくのが分かつた。もちろん精神的な。

精神的免疫。抗体が喉の奥のほうに固まり心臓に抜けて全身をめぐり、脳の隅々に行き渡つていくイメージが僕にはありありと想像できた。そして、僕の脳の中のホムンクルス達は急いでそれらを現実的に置き換えるとがんばってくれた。

だから僕は泣かないんだろう。うん、多分ね。

こんな事を葬式中いつも考えてた。

坊さんが念佛唱えるときも、親父が灰になる前も、親父が灰になつたときも。

普通なら、親父との思い出とか思い出して泣くものなのかな、とかも考えていた。でも、無理だった。泣く泣かない以前に思い出せないのだ。親父への、情愛、尊敬、感謝たちはどこかに消えていた。多分シマリスのように隠れているんだけれども、見つけることはできない。ホムンクルスたちは、死という衝撃を和らげるためだけに働いたのだ。思い出を思い出すことができない理由を考えようとしても、チクリチクリと頭が痛くなつてくる。

だから墓の前で手を合わせて親父に心の中で言つ。親不孝者ですと。

親父の葬式が終わり、何時もどうり兄さんは仕事のため会社に行き、母は仕事のためパートに出かけた。

僕の家族は古い歯車を少しづつ回すように社会に、日常に戻ろうとしていた。

でも、兄や母が一生懸命社会や日常に戻ろうとしているのに、僕だけがダラダラと高校を休み、歯車を回すこともしないで急げていた。

そんな時に彼女が家にきた。

正確に言うなら親父の葬式が終わり、五日たつた土曜日の曇りの日の朝にきた。

僕は前日の夜遅くまでじつぶりと本を読んでいたから、朝十時に母に起されたときは苛立ちさえ覚えた。

「早く起きない。友達があんた心配して来てくれたわよ」

「……友達？ 誰？」

「知らないわよはじめてみる子だもの、髪がふわっとなった綺麗な女子」

僕は上半身を起こして全然まともない頭で少し思い出す。が、それだけの情報ではわかるわけもなかつた。

母がカーテンを勢いよく開いた。窓から見えた空は妙に厚い布団が覆いかぶさつていてるような曇つた空だつた。とりあえず寝ぼけた頭を抱え、ベットから抜け出した。スエット姿で玄関まで行つた僕は驚いた。というか目が覚めた。

そこに立つていた女子は母の言つとうつとつても綺麗でキートな子だったから。

粉雪のように白くて溶けてしまいそうな肌に、金色の波のように胸まで伸びた長い髪。おつとりとした優しそうな目は大きく、また湖のように澄んでいた。顔の整い方が少々子供っぽさを残しはするが綺麗でキュートで美人だつた。スタイルもいいし、服のセンスも悪くない。多分ヴィヴィアンなのだろう、立体裁断のジャケットを若さとキュートさで着ている。

こんな印象的な子がいたら友達にいたら間違いなく僕は忘れたりしない。僕は間違いなく彼女に会つた事はない。まったくの他人のはずだ。

でも彼女は言つ。

「『めん、早く来すぎちゃつた?まだ寝てたよねえ、でも君も悪いんだよ学校ずっと休んでだから不安になるじゃんか。君私の携帯壊れてるの知つてるよね?だからほんとに今日遊ぶのかの連絡も取れないし……だからまあとりあえず来たつてわけ。分かつた?』

彼女はまるで何かに追われている逃亡者のようになってしまった。言われた言葉を心の中で何度も反芻しても理解できずにいる僕を無視してか母が言った。

「「めんなさいねほんとに家の馬鹿が。さああがつていつて下さこ」

僕が口を開く隙を狙つたのか、見事なタイミングで彼女は言つ。

「あつ」

「わあ、いいんですか？じゃあすいませんお邪魔します」

母さんは言つ。

「じつねじつね。とりあえず汚いとこで悪いんだけど、この馬鹿の部屋についてくれないかしら。すぐにお茶とか持つていくから」

そんな、お構いなく。とか、イエイエ。とか、よくある日常会話を、この狭い玄関で繰り広げ、彼女は母に連れられて僕の部屋に消えていった。

僕はとりあえず洗面台にいつた。論理的思考にガソリンを注入するかのようにゆっくりと顔を洗い、歯を磨いた。

まともな、休日の、朝の人間しさを手に入れようとした。

スウェットを脱いで洗濯機の中に放り、室内に干されていた生乾きのロンTを着て、お気に入りのカーゴパンツをはいた。

キッチンに行き、食器棚からスナフキンのマグカップを取り出し、「一ヒーをよそつてゆっくり飲んだ。

兄が起きてきて（今の今まで寝ていたのだ、羨ましい）僕に言った。

「誰かが家に来たの？お前の友達？」

僕は少し考えて「うん。確かに誰かきたけどね。まったく知らない人」と言つた。

「お前の部屋にいるみたいだけど……」

「だつて本当に知らないからさ、パン食べる？」

「あーうん。後コーヒーと新聞頂戴」

僕はマグカップにコーヒーをよそつて、トースターに食パンを入れ、コンロの横にあつた朝刊と熱いコーヒーを、兄に渡した。

「はい。熱いよ」

「ああ有難う」

ただの暇つぶしに、兄越しに窓から外を眺める。空はやつぱり曇っていた。口にコーヒーを含みながら、僕は、世界の果てについての事と、カンガルーのポケットの中身の事と、スナフキンのマグカップの事を考えた。

そんな風に物思いにふけつていたら後ろから固い物で殴られた。

「あんた何でそんなとこでボーとしてんの。フリルちゃん部屋で待ってるわよ」

母は手に丸めた雑誌を持っている、多分それで僕の頭を殴つたのだろう。少々怒り口調で言つた。

僕は尋ねる。

「フミツてだれ」

母は丸めた雑誌で又僕の頭を殴つた。

「同じクラスの子なんですよ、あなたは学校いってないのか？
とりあえず、あなたの部屋に行きなさい」

母に逆らう事なんかできるわけもなく、僕は「一ヒー入りのスナフキンのマグカップを台所に置いて自分の部屋に歩き出した。
部屋の扉を開けると正座した彼女がいた。悲しげなイメージだ、
うつむいていて、何かを考えていると言つかは何かに囚われている
とゆう印象を受けた。

僕はとりあえず彼女に尋ねる。でも。

「ねえお……」

「お願いだから今日一田あたしに付き合つて……」

やつぱり僕の口を開くタイミングを知っているかのような絶妙な
タイミングで、彼女は僕の言葉を遮った。

意思疎通なんて彼女はする気なんてないのだろうか、クルクルと
混乱する。深い深いカオスの海にダイブする。僕はワラでもつかむ
気持ちで散らかった机の上からマイルドセブンと喫茶店で貰ったマ
チチを掴んだ。何度も上下させて一本だけ出して、口に咥えてマッチ
を擦り火をつけた。沈まずにすんだ。

彼女が顔をしかめながら言った。

「私……煙草あんまり好きじゃない。
てゆうか、一言ぐらい吸うよとか声かけてから吸つてよ

「初めて会った君の好みなんて知るわけないだろ。僕は神様じゃないしね。

それにここは僕の部屋だ。いつもは誰にも解なんてとらないよ

「ふむ……まあそれはそうね。でもとりあえず窓のほうに行つて煙草クサイ」

言われたとおりに窓のほうまで移動した。鍵をはずし三分の一だけ開けた。

ついでにコンポの電源を入れてCDの再生ボタンを押した。オアシスの「HONEY」が流れ出した。

「で、僕に何の用があるの?嘘までついた理由わ?初めて会うはずだよね?今日一日付き合つてつづつこと?てゆうかなんで君は僕のうちに来たの?それに……」

煙草を少し吸つて、勢いよく吐いた。

「一番知りたいのは、君は誰なの?」

彼女は少しうつむいて、答える。

「質問攻めだね……まあしょうがないか。私は……新木 フミ。十八歳。森が丘女子高の一年生。君とは初めて会つ……でも事情があつて言えないけど君の事は知つてるの」

「事情?…どんな

「『』めん。言えない」

「はあ、まあいいや続けて」

僕は視線を窓の外に向けた、遠くに赤い風船が空に上っていくのが見える。彼女は話す。

「えっと。どうしても言えない事情があつて、今日一日私と過ごしてほしいんだ。もし用事があるならそれまでの時間でも……で、お願いなんだけど私の嘘にも付き合ってほしいの。

私はあなたの学校のクラスの友達って事と、このCDを返しに来たつて事。

でさ、ハイこれ“借りてたCD”

僕は自分の部屋に視線を戻す。彼女は鞄の中から一枚のCDを取り出した。マンソンのアルバムだつた。彼女は笑顔で僕のほうを見ながら言ひついで。

「で、今日は何か予定はあるのかな?」

「別に特にないけど……」

「じゃあお願いだから私に付き合つてー！いいよね？」

僕は煙草をビールの空き缶でもみ消した。中からはアルコールと煙草のにおいがミックサれたひん曲がるよつな臭いがした。

僕は左手にはめてあるミサンガを口に入れ噛んだ。大体悩んでいるとかとかは僕はこうしてしまつ、癖なんだ。

「まあいいか。いいよ付き合つよ」

と答えた。大体みんな勘違にするけど、僕はせがりかと言えば聞き分けはいいほうなのだ。

「ホンと……？ ありがと……」

「でも条件がある。その言えない事情つてやつを話してくれないならだめだ」

彼女は腕を組んで、まさに考へています。とゆう格好をした。なかなかアクションが豊富な子のようだ。長くなりそうなのでCDを取り出して、スーパー・カーに変えた。一曲めを聞き終わるとじうで彼女は口を開いた。

「言えるとこ今まででいい？」

「どうだい？」

「君の事は友達に聞いてて知つてたの。それで、うーん……君のお父さん……死んじつたよね、で君学校こなくなつたでしょ。それを心配した私の友達が様子を見に着てつて私に頼んだの。大体こんな感じね。」

「嘘だろそれ」

「ホントよーでも言えるのはここまで。後は何を質問されても言えませんー。」

自分でもありえないような事いつてるつて知ってるよ。でも、もう口が裂けてもいえませんからね。」

「どうもじつべつことないとゆうか、なんか水でも掴むような手応え

のないことを言われた。

何でそんなまどろっこしい事をする必要があるんだ。意味が分からぬ。

僕は意味が分からぬすぎるから、とりあえず“返してもらつたらいいCD”（僕が誰かに貸していたらしいCD）を手に取つた。

このアルバムは確かに僕は持つてゐる。でも誰かに貸したこともないれば、この家から持ち出したこともない。今でも僕のCDラックの中に雨の日のカタツムリみたいにひつそりと片隅にあるはずだ。

そう思い、僕はCDラックの中を軽く探した。

でも、なぜだか見当たらない。買ってまだ1ヶ月とたっていないはずだから奥にあるはずがない。僕は不思議に思い丹念にキチンと探したがやっぱり無くなつていた。兄が持つていつたのだろうか。

僕はまた煙草に火をつけ、ミサンガを噛んだ。僕の悩んだ顔を見た彼女が尋ねる。

「どうしたの？」

「いや……ねえもしかしたらだけ。ありえないけど。……このCDって僕の？」

「うん。やうだよ君のだよ。言つたじやん私はCDを返してきただて

「でも君はCDを返してきただのも嘘だつて最初に言つてた気がするけど」

「まあ言えない事情があつて君のCDが私の元に来たのよ。それだいたい嘘をつくときは少しだけホントの事を混ぜるものじゃない」「まあそらかもしねないけど……とゆうことは君はまだ僕につそを

つこへると、そつまうつ事だよね？で、その事情は言へるの？

「……言えない」

「ふー……もういいよ」

僕は大げさにタバコを吸い込んで、勢によく吐き出した。彼女をまねて本当にもうどうでもこいやといつコアクションを大袈裟にするために。

「で、僕は何をすればいいのでしょうか？」

「うんとねえ…… としあえずお父さんと挨拶しよう。仏壇どー?」

「なんで？」

「まだお葬式終わって一週間もたつてないでしょ？その時期にきた訪問客はね、たとえその人を知らないても挨拶しなきやだめなんだよ。知らないの？」

「聞いたことないな」

「としあえず私の家はそつなの、だから早く仏壇につれてってよ」

「ふーんそうなの」

僕は火をつけたばかりの煙草をビールの缶で又もみ消し、立ち上がった。彼女も立ち上がり僕の部屋の扉を開けた。

仏間は一番奥の部屋だ。冷えた廊下を進む。ふすまを開くと、朝だとゆうのに薄暗く、電気のスイッチを入れた。仏間に入るとまだ

線香の香りが残っていた。

仏壇の前に座布団を置き、僕は壁に寄りかかった。彼女は僕の敷いた座布団の上に正座し、息を、ふー。と吐き手を合わせた。

彼女は長く、本当に長く手を合わせていた。待ちきれなくなった僕が言ひ。

「神社じゃないんだからもういいだろ？」

何かに怯えたように彼女の体が少し跳ね上がった。

「あ……うん。……お経よんでた」

「覚えてるの？」

「うん」

彼女は立ちあがり、何も言わずに部屋を出た。僕もその後を追い部屋を出た。

ふすまを閉めるときに仏間が見えた。まだ座布団の上に誰か人がいるようだった。

部屋に戻り、少し話をした後。彼女の指示に従い僕らは映画を見ることになった。映画館に行き、彼女がチケットを持つていたのでそれを観た。映画の内容はよく覚えていない。ストーリーより金さえかければいいと思って作ったのかなと思ったぐらいだ。

昼食を駅前のパスタ屋で食べ、とりとめのない会話をした後、ビリヤードを5ゲーム程して、駅まで行き、じゃあね。と言われて彼女と別れた。

まだ四時を過ぎたところだったので、本屋によつて時間をつぶし、六時前には家に帰った。夕食を食べているときに母から、付き合つ

てるの？と聞かれた。いや、と答えると、もつたいない。と言われた。自分の部屋に戻り、本を読み、今日は一日中灰色の空だったなと思い、風呂に入つて一時前に寝た。

夢に彼女が出てきた。彼女は寒そうに街灯の下で誰かを待っていた。僕がそこに行こうと思つても体は動かなかつた。見ることしかできなかつた。

目が覚めたときにはきずいた。いや本当は会つたあの時に、きずいていたのかもしれない。わかつてると思つけど、僕は彼女に恋していた。

彼女を思うと胸の高鳴りは抑えのきかないものになつていた。何もかもが新鮮に思えた。昨日の空をえ、雲ひとつない青空に思えた。

その日から、何とか彼女にもう一度会おうと行動した。彼女の通つている森が丘女子にも行つた。下校時間から夜の八時まで待つたのは何回だろう？数なんて忘れた。森が丘から出てくる子達に話しかけても、新木フミという名前の子は知らないという答えが返つてくるだけだつた。

学校にも行きだした。なぜなら彼女の友達が僕の学校にいるはずだからだ。クラスの人全員に声をかけたが、知らない。わからない。と口をそろえたように言つた。それに僕のこの出来事を、夢。だが、いい思いしたじやん。とか簡単な言葉で馬鹿にした。

それでも諦めなかつた。僕は他のクラスであらうと声をかけた。それにより知り合いも増えた。しかし、返つてくる言葉は同じものだつた。誰も知らないのだ。沈黙の町にいるみたいだつた。

風が冷たくなるころ、僕は探すのを諦めた。彼女の大嘘は少しづながら僕を傷つけた。彼女があの時言つていた言葉の中に、真実は何パーセント入つていたのだろう。知りたいが、答えてくれる人

はない。これはクイズなんかじゃないんだ。

でもこんなに嘘をつかれても、恋心だけが僕の中に子犬のようにならなかった。

暖かくなってきた。知り合いが増えたことにより、交友関係。つまり遊びにいくことも増えた。それによりいくつかの女の子がなぜか僕のことを気に入ってくれ、付き合つこともした。

もちろん僕の心がわかると、彼女たちは僕を丸められたティッシュのように捨てた。一ヶ月も付き合つことは無い。大体一週間やもつて三週間で別れてしまつた。別にそれでも僕はかまわなかつた。子犬はまだ僕の中にあつたから。

花田 由紀という女の子は、三年の始めのころに付き合ひだした。彼女はなんていうのか、エキセントリックな子だ。服のセンスも、まあまともな言動も、でもそれなりにキュートだ。秋まで付き合つた。彼女は僕が違う子に恋心抱いていても、気にしなかつた。

別れ話を出したのは僕のほうからだつた。

「ごめん……別れたいんだけど」

セミロングの黒髪を搔き揚げ、ピアスつきの舌を出して由紀は言う。

「嫌あ」

ハツキリと聞き取りやすい、よく通る由紀の声はドトールの店内に響き渡つた。他の客が僕らのほうに一瞬だけ好奇の視線を送る。そんな視線を無視して、クシャッと顔を崩したまま彼女は時が止まつたように僕を見ている。

「でもさ由紀もきずいてるだろ？僕は由紀だけを見ていいことを

「そうね、知つてゐるわよそんなこと。セックスのときもいつも上の空だし。あまつさえ寝言で違う女の子の名前呼ぶんだもの。正直絞め殺したかったわ」

「じゃあ何で嫌なんだ?」

「嫌なものは嫌だからよ。いいじゃない別にあたしがそれでもいいって言つてるんだから」

「でもそれじゃあケジメがつかない」

「他の子が好きなくせにあたしの事OKした時点でケジメなんて無いわよ」

「でも……」

「ああもう鬱陶しい。ならいいわ別れますよ。それで満足?」

「うして別れた。しかし、彼女は別れた後も変わらずに僕を無理にさそつて（僕の意思是そこには関係なかつた）遊んでいた。もちろんセックスはしない。いいじやん。と言われても断り続けていたら、祖チン。と言われた。どうでもよかつた。

大学は兄が行つてもいいと言つてくれた。勉強はそれなりにしかできないが、それなりに頑張り何とか一流の大学には進めそうだった。

入試の日に初めて知つたのだが、由紀も同じところを受けていた。何とか合格し（由紀も受かつたのだ）四月の入学式に、また僕は彼女。新木 フミと出会つた。晴れた青空の桜が咲く校庭で、子犬の親を見つけたのだ。

慣れないスーツを窮屈に着て、大学までの坂を上る。式の案内を受付で貰い、体育館の一一番後ろから三番目の一番右端に座った。

偉い人の挨拶。プラスバンドの拙いブルームス。また偉い人の挨拶。まさに型にはまつた入学式的な入学式だ。本当に祝う気持ちが少しでもあるのだろうか。

うんざりした僕は席を立ち、近くにいた教授らしき人に、気分がすぐれない。等の適当ないい訳で外に出た。体育館の重い扉を開いた瞬間に目に入った空でさえ入学式的な青空の気がしてならない。喫煙スペースである中庭に行き。硬い木製の四人掛けの椅子に座つた。そして、できるだけ何にも考えずに煙草を吸つた。そうしないと本当にうんざりしてしまつてもう学校に来ない気がしたから。ぼうつとしていたら、声をかけられた。

「あ、いたいた。ねえ君どこから来たの？」

後ろを振り向くと、少々顔が大きい男がいた。でも整っていた。僕は答える。

「君は？どこから来たの？」

「あつ俺？春日高校。てかさ、入学式って固苦しいな。君が出てくとこ見えてさ便乗して出てきたんだけど、絶対こっちのほうが正解だよな。で、君は？」

彼が煙草に火をつけたところを見て、僕は簡単に自己紹介をした。高校の名前と自分の名前を簡単に。僕の話の後、彼が僕の高校に通つていた友人の名前を挙げていった、知つていてくれた。僕は全員知つていた。それもそうだ。なぜなら彼女の事を聞いて回つていた僕に、同学年の子で知らない子なんていなかつたから。

「へー。お前顔広いな」

「そんな事ない。君ほゞじやないよ」

「はあ？」

「いや、それより君の名前は？まだ聞いてなかつたと懇うけど」

「ああ、そうだよな。なんか話し盛り上がっちゃつたから言ひ機会なくしたなあ。俺の名前はな小林 テツ。テツって呼んでよ」

入学式はまだ行われていた。と、思つ。テツが勝手に喋つていつくれるので会話が途切れることは無く、時間を忘れていた。

しばらく話し込んでいたら、気がついたら人がまばらに中庭に集まりだしていた。数人の女の子と話していた由紀が笑顔で僕を見つけて近くに来た。

「あんたも分かりやすいサボリ方するわね」

「あんなものは亀のエサにもならないからね。分かりやすいサボリ方してもきずかれないのさ」

あつそつ。と氣のない返事をした由紀は、僕の隣に座りタバコに火をつけた。テツは屈託のなさそうな笑顔で言ひ。

「どうもはじめまして。小林テツって言います。君は？」

「ああ。あたし？花田由紀。こいつの彼女」

「違う。別れた」

由紀は文句がありそうな顔でこっちを睨みつけているが、僕は事実しか言つていないし、非難される覚えもないのに正面から見返した。その場を見ていたテツが微笑んで言ひ。

「なんか複雑そうだな」

「うなのかな？」

僕らはお互いの趣味や好みなど共通点を探しあいながら、まさに始めたて的な会話をした。

これで帰つてもいいらしい事を由紀から聞いた僕等は帰宅することにした。由紀は友達と帰る約束をしており、その友達の所に一人で行こうとしたが、テツが一緒に帰ればいい。と言つので僕らもその友達の所に行くことになった。中庭を抜けて、少し急な坂を下る。そして、桜咲く校庭の片隅に彼女の姿を見た時に早鐘のように僕の心臓が高鳴った。

「ゆかり。こっち

フミではなくゆかりと呼ばれた彼女はこっちを向いた。胸あたりまであつた髪は肩の辺りまで切られていたが、似合っていた。

あつちも多分僕に気がついた。由紀に、こっち。と言われているのに動こうともせずに大きな目を見開いていた。彼女だけが時を止めたように動かなかつた。からうじて彼女の後ろに散つていく桜での流れを感じることができた。

僕は彼女に向かつて歩き出した。早鐘のようになる心臓の音を四つ数えて一步踏み出し、また四つ数えて、一步ずつ踏み出しながら

彼女の元に行つた。なぜだか僕は口の中が渴いてしょうがなかつた。でも何とか冷静にとめて言つた。

「久しぶり

「うん。久しぶり」

と彼女は返してくれた。これが彼女との再会。由紀やテツが後ろから声をかけてきたのは覚えてい。僕に向けてか彼女に向けてかは分からぬ。何を言つていたのかも忘れた。いや、聞いていなかつた。キャンキャンと叫ぶ子犬の声で聞き取れなかつたのだ。

分かつてゐた事ではあるが、彼女は何もかもを偽つてゐた。由紀が彼女のことを紹介してくれた。彼女の名前は新木フミではなく、千葉 ゆかり。高校は森が丘女子ではなく金枝女子。ちなみに由紀と中学まで一緒だつたらしい。いくら誰かに聞いたつて知らないはずだし、又、森が丘の前で待つていても会えないわけだ。

帰り道、僕は何も言わなかつた。彼女に言及しようと思わなかつた。

彼女、千葉ゆかりも何も喋らなかつた。由紀は不機嫌だつた。もしかしたら僕の探してゐた人がゆかりだということにきずいたのかもしれなかつた。テツがいくら一生懸命、皆に話を振つても誰もが気のない返事を返すだけだつた。

駅前のコンビニにより、牛乳を持ってレジに並んでゐると、ゆかりに声をかけられた。

「何も言わないの？」

「……何を？嘘ついてた事について？いいよどつせ事情があるんだ

る

「うん」

「なら言えるようになついたら言ひて。さすがにこれだけ嘘つかれると氣分悪いから」

「……わかつた」

子犬が可愛いから笑顔で彼女を見ると、彼女も笑顔を返してくれた。

僕らはコンビニを出て駅のホームで電車を待つ。由紀は相変わらず不機嫌で、どこか分からぬ所を睨んでいた。電車の中でも由紀は睨んでいた。テツが電車から降りるときも睨んでいて、僕と別れるときも睨んでた。じつと、どこか分からぬ所を、じつと。

大学生活が始まった。由紀は大学で会うときには不機嫌ではなくなっていた。僕は大体テツと一緒にいた。彼の友達とも友達になり、僕のゼミでできた友達とも彼らは友達になった。

僕は高校三年のように広く浅く付き合つことはせず、この固定されたメンバーといつも一緒にいた。

ゆかりは由紀とその友達数人と大体一緒にいた。由紀はいつもと変わらない態度で僕に接してきた。ゆかりは僕に線を置いて喋つているような感じを覚えた。国境のようなそれは、僕がいくら越えようと思つても無理だつた。でも、僕等は彼女達のグループと仲良くなつた。

夏。海に行つたり、山に行つたりした。

秋。紅葉を見に行つた。冷たい海も見に行つた。

冬。僕はゆかりから言えなかつた事情を聞いた。

聞きたくはなかつた。いつまでも内緒にしていてほしかつた。酷く辛かつた。

君のいえない事情の事は箱に入れて、地面に埋めてしまつて、忘れて、関係ないものにしたかつた。事実僕は気にはなりはしたけど彼女に何も尋ねなかつた。僕が妄想する幸せな未来で、君と思い出話をしているときに「僕等は変わつた出会いをしたね」と言い合つただけでいいとさえ思つてた。

僕という存在が近くにいたからこそ、君は僕に重ねていた。

一年が終わる月の始まりの頃。ゆかりは僕に言えなかつた事情を言つた。

飲み会だつた。いつもより皆が多く酒を飲んでいた。

もちろん僕も由紀も、ゆかりも。

由紀は大声で叫んでいたかと思うといきなり寝てしまつたらしい。テツから聞いた。

夜の十時半。飲み放題の時間も終わり、店を出た。ネオンの光のせいで空を見ても星はなかつた。二次会組と帰宅組で別れた。由紀は家が近くだつた子達におぶられて帰つた。

僕とゆかりは残つた。一次会はカラオケだ。ゆかりはいつも僕に線を置いているのに、今日はその線が消えていた。それがうれしかつたから僕は残つた。

夜の十一時半。盛り上がりがつてゐるカラオケの中、ゆかりが泣いた。誰にも見つからぬようにひつそりと。僕はきずかなかつた。テツがきずいた。

外でなぐさめていたらしい。僕はトイレに行くときに、テツとゆかりの友達がなぐさめているところを見た。用をすませ、僕はゆかりのもとに行つた。

ゆかりは泣いてゐる理由を絶対に言わなかつた。テツとゆかりの友達は他の奴等に呼ばれて部屋に戻つた。

ゆかりが泣き止むまで何も言わずにそばにいようと思つていた。

泣きたいときには泣けばいいのだ。だけど、ゆかりは泣き止む事もせずに、何も言わずに立ち上がり外に向かって自動ドアまで歩き出した。声をかけても何も言わずに歩いていく。外に出たゆかりは振り返る事もしないで、ゆっくりと、泣きながら歩いていく。

僕は急いで部屋に戻り、自分のピーコートとゆかりのコートを持つて追いかけた。

急いで外に出てゆかりの歩いていったほうを見た。もう小さくなつた背中が見えた。

走つて追いつく。ゆかりにコートを差し出すと無言で着た。そしてまた歩き出した。

僕は一步後ろを同じ歩調で歩いた。どこまでも彼女を追つて歩いていけるようだつた。

僕は何にも考えず、見知らぬ町まで歩いた。ゆかりは見知らぬ町の僕の知らない小さな公園に入つてベンチに腰掛けた。僕も隣に座つた。冬の寒さは僕の体の芯まで凍らした。

僕は公園の時計を見た。一時を回つていた。吐く息は白く、僕たちの前にいつまでもどこかに行かずにそこにあつた。僕は、待つてて。と言つて自販機に走つた。暖かい缶コーヒーを一本買い、温かさを噛みしめながら戻つた。

缶コーヒーをゆかりに渡した。ゆかりの目はウサギのように赤かつた。僕等はプルタブを開ける事はしないでカイロのように使つた。「「「めんね」とゆかりが言つた。僕は何も言わずにブランコ眺めていた。

もう一度ゆかりが「めんね」といつた後、決壊したダムのようゆかりは色々な事を話し始めた。

好きな音楽の事。おいしいケーキの店の事。不味かつた店の事。これが好き、あれが嫌い。と分かりやすく端的に喋りだした。しかし、ゆかりの口からは湧き水のように話が流れ出し、端的に喋っているはずなのに終わる事がないようになつた。僕は一つ一つ丁寧

にあいすちをうちながら聞いていた。彼女は何かをナイーブに包みながら話していた。僕はナイーブに包まれたそれを真剣に考えていた。そこに彼女の涙の理由があると思ったから。
そして、彼女は深く深く呼吸して僕に言った。

「今なら……言えなかつた事情を全部言える『が』がする」

「うん」

「君に……言つてはいけない事だと思つる」

「どうして?」

「……誰にも言つてはいけない事だと思つる」

「やうなんだ」

「でも……」

「言いたくないなら言わなくていいよ。それに、誰にも言つてはいけない事なんだらう」

沈黙。カイロに使つていた缶コーヒーがぬるくなつてた。

空を見上げるとネオンで隠れていた星が見えた。ビーズをちりばめたような空だ。すごい綺麗だ。

「私はね……」

「……私はね、……あなたのお父さん。幸雄さんと付き合つてたの。

……愛し合っていたの

聞き間違えたと思った。僕が声をかけようとする。

「えつ」

「私はね、幸雄さんと愛し合っていたの。今日、この日まで。幸雄さんが死んだこの日まで。幸雄さんは私を救ってくれたの。レイプされそうになつた私を救つてくれたの。この公園で。素敵だつた。何よりも素敵だつた」

彼女は喋りつづけた。僕の親父がどれほどすばらしい人か、男性恐怖症になりかけたゆかりを親とは違う大人の人として親身に慰めたか、恋心を抱いたのはゆかりからだとか、初めての時を辛抱づよく待つてくれたとか、怖かつたけど親父だから安心できたとか。聞きたくなかった。本当に、聞きたくなかった。耳を塞いでしまったかった。でも、できなかつた。冬の寒さや刺すような心の痛みに手が金縛りになつたように動かなかつた。

親父はまさか自分の息子と同じ年齢の子と付き合つとわな。といつも言つていたみたいだ。

僕の親父が死んだ事は知つていた。あの時の数少ない真実の一つ、“友達にきいた”らしい。友達。もちろん由紀だ。ゆかりは由紀に不倫の恋相談をしていた。親父の息子、つまり僕が由紀と同じ高校なのは親父から教えてもらつて知つていた。

「目の前が真つ暗。本当に真つ暗になつたの。幻想や夢や愛、それに幸せだつた現実が無くなつたことに理解しきれずに泣けなかつた。光が一切届かない洞窟の中に放り込まれたみたいだつた。目の前に手をかざしても、真つ暗でなにも見えないから毎日怖くてしょうがなかつた」と、彼女が言つた。奇遇だね、僕も同じ気持ちだよ。と思つた。

親父が死んで五日たつたあの日。訳の分からない気持ちと、僕のCD（親父が勝手にゆかりに貸していた）と、最後にサヨナラを言いたくて、僕の家に来た。彼女は親父との関係をばれてしまつてもいいとさえ思つていたみたいだ。

ばれてもいいと思つてついた嘘なので、案外、楽に僕と母さんを騙せた時はこんなものかと思つたらしい。あの日、僕と別れた後、ゆかりは初めて泣いたらしい。

それからの高校生活は、涙とともに過ごした。もちろん一人のときには泣きながら飯を食べ、泣きながらテレビを見て、泣きながら勉強した。忘れる事なんてできない。いや、忘れようなんて微塵にも思わない。

大学で、初めて僕を見たとき。幸雄さんが帰つてきたって錯覚した。久しぶり。とある人と違う声で言われたとき、ドンと突き落とされたような気持ちで幸雄さんじやないつてきずいたらしい。

君の、優しさの中や、言葉の中に何度も幸雄さんが見えた。と彼女は言う。意識してなかつたつもりなんだけど知らず知らずのうちに君の中に幸雄さんを探してた自分がいた。そしてそんな自分を恥じた。と言う。

幸雄さんが死んだこの日。私にとつては呪いたくなるようなこの日は、一年たつた今でも、どんなに頑張つても涙が出てくるの、なんでだろうね。と、言う。

彼女はまだ喋つている。どんどん言葉があふれている。僕は空っぽの心で必死になつて逃避している。この現実から。僕はどこか知らない町を旅する人の事をずっと想像していた。

そして同時にきづく。彼女は僕を求めていることを。しかし、もちろんそれは、親父の代替品であることも。僕は僕なのに、彼女は僕を親父として見るだろう。それに耐えられるかどうかは分からない。

ふと視線を上げると、空が青くなってきた。時計を見ると、もう五時を回っていた。

「帰る」「

と僕が言った。

彼女は僕の言葉なんて届いていないように、まだ喋りつづけていた。僕は彼女の腕をつかんで無理やり立たせた。

そして僕は歩く。彼女の手を掴んだまま。方向がわからないから適当に歩いていた。歩道橋を越え、信号を渡り、地下への階段を下りた。気がついたら地下鉄のホームにいた。心ここにあらず。それは僕ら一人のための言葉みたいだった。

彼女の分の切符も買って、地下鉄に乗り込む。まだ動き出したばかりのソコに乗っている人はみんな僕らのように心がないみたいだつた。

彼女の降りる駅の近くになつたとき、僕は彼女を抱きしめた。そうすることで、キヤンキヤンうるさい子犬は騒ぐのをやめた。正直もうこの子犬の面倒を見るのは嫌気がさしてきた。

地下鉄の自動ドアが開き、僕は彼女を崖に突き落とすつもりでドンと押した。

彼女はひどく驚いた表情をしていた。そして、透き通るような目に力を込めて、いたく、まじめな顔で僕を見つめた。

「またね。雄介君」

彼女が言つたのかわからない。でも確かにこう聞こえた気がした。

「サヨナラ」

扉が閉まりかけた一瞬。消え入るような声で、僕が言つた。

僕は彼女と別れた後、沈み込むよつて座席についた。ひどくまぶたの奥が痛んだ。

その痛みに身をまかせながら考える。僕はどうすればいいんだろうと。

ゆかり。親父。由紀。みんなが槍を持つて僕に突き刺していく。

思考が、混乱する。僕はミサンガを強く噛みしめる。

どうして由紀は僕と付き合つたのだ。彼女はゆかりの友達で、僕の監視者みたいなものだったのだろう。なぜ入学式のあの日、彼女は僕とゆかりを引き合わせたのだ。すべてを知っているはずの彼女は、僕に何を求めているんだ。

ゆかりは僕に親父を重ねている。ゆかりの心の中に親父の影しかない。僕は、この子犬。恋心をどうすればいいんだ。ねえ教えてくれよ誰か。

僕は、親父の代替品として生きることを耐えられるのかい。無理だ。何でいまさら親父の陰に隠れて……。

そうか、と唐突にきずく。

そうだったんだ。こんな事があつた今だからこそわかった。僕は、親父が嫌いだつたんだ。

いくら葬式のときに思い出を思い出そうとしても、思い出せないはずだ。

今ならわかる。憎んでさえいたのだと。

これは嫉妬なんかじゃない。確かにそんな気持ちがないのかと尋ねられたら、答えはノーだ。でも、違う。僕は今よりもっと前に、親父のことを憎んでいた。

そうだ。

そうなんだ。

そうじやなきゃいけないんだ。

いけないんだ……と小さく小さくしゃがれた声でつぶやきながら僕は静かに泣いていた。

知らず知らずのうちに目を閉じて僕は眠っていた。

「ここはどこだ？　

地下鉄の車内には僕を含めて三人しか乗っていない。

どこなんだ？

地下鉄は走る。ガタンゴトンと一定のリズムを刻んで、目的地を失つて。

何の叫び声だ？五月蠅い！やめて、やめてくれよ！

それは電車が走ったときに出る風が、地下鉄のトンネルに反響したもの。まるで、獣の泣き声、咆哮、悲鳴、のように僕の耳に残る。

なんだって？もう聞きたくない！聞きたくないんだ！！

そして僕はやつと耳をふさぐ。いくらか軽くなつた叫び声を耳にしながら、僕はまた目を閉じて眠る。

多分、そこから僕は目覚めていない。

- 目覚めていない。 -

(後書き)

読んでいただき本当にありがとうございました。

今回、自分ぽくないモノを書きました。ので、少々疲れました。

一応続きがあるのですが、書くか書かないかで迷つてます。もし書いたとしてもかなり更新が遅れると思います。
評価、感想、メッセージのほうがもしあれば書き込んでください、
ね。

最後にこんなとこりまで読んでいただき本当にありがとうございました。
した。

今日、朝雪が積もってました。明日は晴れるといいですね。
ピース。

一柳 紘哉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3822a/>

リトバス

2010年12月14日18時56分発行